伝説 浦川士郎集

下

長月集

[illegible]

[illegible]

[illegible]

九月十三夜

[illegible]

二十年[illegible]

素堂

新波松の中秋の月　后の月　嵐蓼
雲ぬけて月の出しかたぶき山に月出る夜　十三夜
まるかてらす人とも見えぬ　后の月　素翠
雪松雪晴
子星雲一ぱいのうすの月　浪く
陸奥行脚のとき
出かけに出てかすみ月　十三夜　唯聲
ありくとてもとへぬ　后の月　素翠
○
十三松陸奥はもうめの前　濁子
坂の月たゞの月　后の月　宋化

明るそれいさうし　十三夜　素翠
○
行素雲かくれもうすの月　宋化
俳山を見て坂の月見ぬ　玄対
久しぶり月のうしろの坂の月　素翠
○
后の月　雲ぬけ出てみうらうしろ
白鷺の羽ぬくやうな　后の月　弘武
うしろ山の二度雲出る月見ぬ　玉角
素翠
○
后の月　松ハ　ちやき本業うれ　嵐雪
山茶花牛の背ぬきり后の月　芭村

うつくしき葉はの初もみぢの月　素梁

雲芭蕉葉

ちるはちるひはぬれ葉る月きもてあそび
あしたゆふべまつはのしたの傍あり
けるこれの月より俗く本覺は渡る
ちるなりあこがれ深しまし
ちるも又月のためとく居を出れば
しかおきうきあさるべき月の和
くをつくし源の却りひ出せん

ちるなし

はちるひを月を拾くやかをうえ　素梁
月なしたる月名　徐水

二枝さくらをうしなはの月　素梁
白枝月れくさ十三枝枝時なりはまを
忍ふ八月いの月　涼し
あるし中秋の月いようしはもの名
雲雪はさうもなく書きやるも涼の
雲ちりうきはの月
はうみもちれあ
不二はくは二枝の月を一枝ぶ　素也
十又枝の雲八見ゆり石の月　素梁
○
ちるのうきをふ石の月　拂良
十三枝まる雪月ちるは中一ぶ　石菊

[illegible]も[illegible]ほけし后の月　素梁

○

月うけやうく[illegible]の細道　玉角

天仙をいまくまつて后の月　西園

契沖　何ぞら笑ん后の月　素梁

○

二度の月毎年を毎年あけ　北線

二枝まく月見ることまれなり　文水

二つ者さひしきふけの后の月　素梁

○

[illegible]かくれるやうに后の月　紀風

はるきてゝ森入てゐる後の月　嵐葉

[illegible]　後の月　素梁

○

山一を二枝の月や甲斐武蔵　白雄

三越路の[illegible]きめれ后の月　左琴

[illegible]山[illegible]て后の[illegible]　素梁

一水一月の水る月[illegible]

[illegible]ひとつの月をとゝ

神[illegible]月いくら[illegible]　素堂

白玉と芋を交[illegible]の月　玉角

白雲のあいれるつゝ后の月　素梁

○

梅屋は[illegible]人も月見る事　士朗

へたるもしらず人も語りぬ秋の月　白雄

人はしらぬ海の月見る山路哉　素堂

しらるゝかたもなく秋と侍る者ん細聖は里よ

やとる

やせもせず蘇の秋きり月一松　魚心

蘇峰て猶ハ松をけ十三夜　嵐雪

月を恨て蘇ハ峰ぬ十三夜　素堂

○

あきたらぬ身はうとも后の月　弁支

あるゝ河の影ようろひぬ后の月　百雀

秋やゆく秋や又来る十三夜　素堂

仲秋の月ハさらしの里焼きて山と

なくさまかねて秋あいはるもまれもまれ

まてとあるゝ月十三夜となりぬと

宵ハ宮ハ宮のみうとのもあてみを

けるまりて安ゝ名月とゝもやし

后の月あるゝ二夜の月なといと

矢人の見ぬ方士文人の風雅をうら

るあるゝ第人ぬりてあるへき物と

いひ見ハ山野ハ篠森もうるゝ

うゝひとくまきの紀瓢を松尚共

きくるを白鷺とわるゝ鷺の家の

素堂翁よ山きゝ人の一梅いかゝ

二ゝ蘇ゝ又唐奇をけ松ゝ

たちとたつまくまもとゐとゐはらうくゐ
かけくまはゐのりてゐとした和宮
なうう　ちらく吹ちとかう雪きたる
月も一きたまくあるやうてゐ中く
ゆうきあるひなりきたし
おしらくんもひうう　后の月　牧星
后の月たくくい宮治の書ゐん　越人
稀なる稀なる月　和十三和　素梁
毎年月見けうう
春うきう春　西えの設の　十三和　玉角
歳ひう和春てゐふやきん后の月　春旋
見ゐくんもうくい見ゐく后の月　素梁

后の月いうくも吉きゐうくんより　猿左
吉うくゐうくうゐや月は十三和　素圭
月きう見ゐ和やゐ月は去みゐ　素梁
十五和十三和　西は路けうう
如海は辺ゐ和行御して
うくゐまう稀神ゐう月の宮　数西
十五和ゐ西ゐなるゐる十三和ゐ清けれ
又ゐ月ゐあゐは　鬼実
伝うくゐはゐうくゐ　素梁
同隠相求ゐ　后の月
稀ゐ本の記くゐ　月と戒　素老

去れば日数人を老けゆる后の月　長翠
和歌を以て慰しそ后の月　素梁

○

十五夜の明月うも十三夜　江戸　素外
時くるゝ十五夜却り人十三夜　仙化
秋の月の中より後の月哉　素梁

○

松風をしらべやる后の月　杜厚
引板鳴子板の子板も月乃哀　孤屋
七宵とて引て遊ぶる后の月　素梁
あらしも例の如くへのかべをあしらいも
此頃冷さかるゝ若人亭を出る夜を

みとりかけゆまるひ松のくゝみ法もんを
けるゝさゝハ又寺ゝくゝ杖笠かゝる
ゝなりて茅舎の松乃ゝもさゝ折ゝる
小坂のゝ昌精舎を彼園逸羅
墻をゝゝみゝく粗ゝ水りくゝあきも
たゝゝを叶ゝ松ゝ折ゝけゝるゝ秋ゝくゝと宵
ゝゝゝゝ蘭笠を杖かりてんと二
二ゝ雪ゝゝゝやゝされゝゝゝゝ
互弱てゝ宵ゝゝゝゝれん后の月　汁入
かゝ映ゝ月ゝゝ屋ゝ文科の思ゝあゝを
ゝめて一俳ゝ茶ゝ縁ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝハ孔行徳ゝ後の月ゝ　素外

明月は代々あらそひて石の月　素槃

○

清る秋をかぞへそめし月は多けれど
新二秋たゝぬ福原の月　柳荘
仙洞のうつり新造後の月　杉風
御井東西をうつす遠く高詩もむつうして　素槃
ある農夫は又の位にてこそ
清きも乏しきを作りけるを熟く
仙台の唐巷をうれて石の月　伯水
一片の雲は未絨のうつや石の月　木節
忘れぬるは雲の外十三夜　素槃
甲斐の国の詩を思ひ出て

仮寝をもひを長月は月いやまさる
人々訪ひ来てあそもいてく更に
寄れば山は暗あるくなをつゝやくも　石牙
暫くの雲の中あり人は十三夜　計臨
月は晴せは十三夜　素槃
見情しく雲あり十三夜

○

水のまさく池はひつゝや石の月　芝村
水と秋ぬせもりて石の月　晩鶯
不見ぬ秋のあるかや石の月　素槃
山もとやとりく

俗と俗とを兼ねて后の月　嵐葉
葉のもみぢも移りぬる十三夜　江雲
あるあ戸を閉てたくなる月一夜　素葉
三井寺とかつかつ新ぬきもせぬ人へも
野川口共実ふ稲く打ぬへくるあ
らしを破の窓のつれい稲葉共出ぬ
行もあしすり乾茶をあく盗人を
ゆるさしとかつ
とかつかつ共の稲のもみぢ后の月　景兆
編さし共籠こ書を後の月　正秀
立て約こかつを拾く后の月　素葉
翼中秋こかつて又暖なり

雪ふる　さても寒き后の月　宗波
暖石を暖めせ后の月　弧屋
和こかつはい蔵也て后の月　素葉

○

家こもりく物をとくこかつ后の月　仙化
法の月水ようかき空井戸　樗良
中金こかつ久しくなる后の月　素葉

○

葉りみちかこかつ立てや后の月　半残
月月こて学のりみちに紅もぶ　芸門
りこもりを拾い紫に十三夜　素葉
甲斐に出の牧くハ古き書ても見

こゝろと今は名ばかりなんのこゝろ今
はいかに煩といつゝおもたしり物か
やゝもくれぬ名をもとゝのひとり
ゆくもあるてあやしけれ世間とやうす
月はゝ事もこゝろまこと
後は月聖山よりあるる物はなし
聖もゝ物てかへゝ后の月　涼帝
見ぬりは聖よりはゝの十三夜　乙由
○　素槃
さらくまをゝくたくや后の月　キ角
十三夜はゝの数のゝのこゝまて　湿之
笠やまて物やうなゝ十三夜　素槃

いつは秋も月を祝こゝく
月かをを名歌にのこゝ世扇川　自乎
后の月長きをゝ此今宵　文芝
后の月見ゝもとゝ物ゝ　素槃
○
后松は一ゝをゝまく后の月　文甫
こゝろやいれ四つゝまり后の月　吳山
けゝゝゝ八週をまゝ八ゝて十三夜　素槃
○
物乎此ゝ名なゝまゝ後の月　阿上
海ゝ重てひゝ夜まゝ后の月　芝村
何こゝも後こゝまゝや后の月　素槃

安房はやうやうくれ
ぬるとて五里石の月　若翠
武蔵の合歓の花の落ちぬ　石の月　墨花
陸の月名残を惜しむ　素堂

○

ふるさとなる木樵ひめ石の月　利牛
石の月　稲垣いくきやうとうれ　白雄
うそぶくハ月の十三夜　素堂
ゐなりまさるみまれた
あるうれ面も尽きぬ　石の月　降雨
石の月面も何とも名残れ　士朗
くせものれをうしてる後の月見ぶく　素堂

○

晴れ雲もゆりや十三夜　支五
晴ハまことにしるや石の月　素龍
秋の日を忘れて初十三夜　素堂

三義法師の庵をたずねて
彫ひ入侍るに四里を去る事
五十里しみく動ハ出ぬ
切り盤をさしてまもれる友の
里ゆ有ともくれく帰人を明るさ
かね　秋なりけりまし
拾遺ものく人を待ちもて月見ぶ　芭蕉
おろしつ本をもこまし　石の月　芭角

よくさたかに戒しおきし后の月　素梁

○

葛にもかきるもあるる日や后の月　秋風
月二枝くるくるつるのゝ如なる　松翠
ふんへをあれ月もくれ十三枝　素梁

蓋は桂いつぐもちて後の月おもて
めをとをとをとも本書は頭おもてなるを
うう歩蓋はもをしく后の月　溪苑
蓋月ふ本急ふ仏ふ自蓋　字波
貴一は蓋ふ八ふ八ふ後の月　素梁
十三枝は自を蓋ふ蓋ふ蓋ふ
はりふの風流なりけり

庵人上は花ふく后の月　芭村
出来今明物を見ふく后の月　入花
紀港は三十日枝中后の月　素梁

今蓋は月おもく蓋はう人ふ
月ふ古ふ
うふ日をふ年ふふふふふ
枝をふ月ふふふふを庵ふふを
蓋ふを蓋ふ芭蕉蓋は留ふ
ふくふふふ男ふ
ふふふふふふふふふふ
ふふふふふ種をふふふ枝ふ
ふふふふふ服をふふふふ財ふを
蓋国は後人とふふふふふふ河

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ひくへきなり　嵐蓼

いつもかく藤[illegible]なるこの月　[illegible]

十三夜藤[illegible]人[illegible]と[illegible]　[illegible]角

后の月松やさかりの江戸[illegible]　素槃

十三夜[illegible]れぬ月は出る[illegible]

○

たの[illegible]ふ二夜の月は[illegible]　素老

兼好後[illegible]ける[illegible]の月　支考

白きくも一夜は[illegible]十三夜　素槃

○

后の月[illegible]　蘆門

さひ[illegible]や后の一字も月[illegible]　徐青

今をとを[illegible]知[illegible]月夜[illegible]　素槃

此吟也　麟居士對月明所作

文化丙子　孟春釋月潮撰焉

月見記

誰を誘ひ給ふる清き人と招るゝ心は蓮ゝ
よりもまのあたりなる月の友かして今おのあそしたる
淀川は急さらに代えとさもあへまゝ杖を
ほしの老もあるゝねいおのく筆をけ衣打ちをう
てまう川てを神は二橋をとうあるあるを出ぬ反すう
の橋く何のやうかの寺るゝ例の事るれた
うしに代細魚をとるて河岸つるしなさまをうふる
夕日花やうる物またるふ拍ゝうほとるく照なう
重るいれ清うもかくそたのりあくる聖月乃
うし此三ゝうの笑てきゝやうかるうやかるくま
こゝろるく酒あゝをを芸堂の餘念うう眺入く

月居述

あるとれよき毛芝ふもあるとれやれ許さハ爲てん
拙をと獨こもちたくはてろを家を情ひ嵐をい
ろ〳〵いろ花ぬれ人をまたあり一ハ此聖れるれあ也
かきるを喰さ後初しうろの也とをろ

秋ハりれ牛一さへ芝れ家を吸ふ　雨葉
しろしなもの〳〵あるものこ葉鶉改　芸堂
唐粕や鶉ハ何をとをれうを　求古

月や出〳〵ぬいさとを急きくころ〳〵ろ〳〵ぬ変ふまうつ
家ふや名ふおへるさくれ本あるたちるひていや
弟くしきかるちうを家かさん月のやをを
いふうれしてはちを家〳〵まうけるを也とあさよ
たくく寺ち入を茶るきさを石変くよしき

月を也月しろハまるを落あるやうをれハ舞〳〵ふ
をのそこ〳〵取ちしつく破てを結ふまうふて八結　蜂友
変つ色〳〵月を年〳〵と稲延　芸堂
奈良山の月を生鶉よあれふ　雨葉
月結ハ人ちうかハ芒原　求古
さそれ今山れあるこハ月の人　東宜
月まれか砧おとを里いくつ
かして豪南坊ふるを数峯ひとつくあふる
一輪れひを月をるさて〳〵たくあくけうわし
題ふとくうちまりるあくうハ生鶉よ陳ふ級窓山
ふるへ〳〵

文屋〳〵く揺ふん〳〵やら雨月　芸堂

二つ三つ四つと遠ざかる月の友　東宜
名月よ志賀の都ひろみてや弁の城　永古
月眼前二千里おもかすみ　雨菜
今やうに生絹の弱ゝしけれ月の雪　悠友
新月やとひゝ遠く弁慶山　月居
名月を高しゝや男の拭わるれ
きゝ禁のたりや田舎墨を感しもかく花ゝ心
見てゝ見る富をかりし成いつりれ人は光ゝなる
ものゝとうち通しゝく巣かゝちよしほるを求古
ひゝを年一若は書あきるかやつきしていく
水流水興をかへんとそくのうをさて五歩ゝ一吟
十歩ゝ一詠

祇園やうしてうれ　雨菜
野村ゝをひのをくさめる月をおれ月見と　悠友
交ゝ出ゝこゝちせゝられて金波銀浪を右左て　永古
の海ゝ船あをくゝる舟あを吉河ゝ漕来る風形　東宜
船ゝ人えゝ船ゝ船はをもはをゝをみかゝひく　芸雪
耳はは根をくゝゝ人ほをくゝと長柄はは柄も
たゝ今浮ひ楼はは船ゝも幻ゝさへ船やうゝく

やまとをろうれ代くの松ひまなくおりしいやら
ふくおりしろさも果くるとまるあたなるまりて
ゆくおよひれ遥遥そるをもしや

大坂れ月自慢せよ毫を舟　雨茉
実あるハ江にうたをん　紅の月　求古
月よりも風ハけしかるを舟　東宜
ひとをく持て来て紅の月　芸堂
初汐れうてもゆるを川の月　蜂友

袖たをれ雪ゆるおとろきて小夜ふけぬ
紅ひるめも眠かるもよいとるやらんとて川崎と
いつをみをおりけるろ粉なるあつをハ天波れ街を
西へなけかへ横るけりて絵よかの義士墨堤何

かるる紀念れ吉井れ月ミおとて有槻庵よいを
さわくあるるかとまをは情あるを人をやるてこれるる
柴折くへおるる柳まるくもるあくをもあくと盃
きよるるを幽さるをさるを男はるれ寒ハさるく
しるるれ相もけをけも蹴ーれををあやるひて敬とる
せるるをけをハこ五れるけを二八れ光をるるをるく
あるるをもまるるをれ紅るれかくや姫るを巻の志を
るをア戸はくあるるを上戸爺れるるちいる斗
よかとれ

徐いるくっぽりや月も縮れる人　月居
くるをとて月やるれるやをねるる人　雨茉
をを城をる巻れそもねん月一板　蜂友

いれまうらて出しるしあさの月　芸堂
いほの井月みさえて萩くけん　求古
あるしよろこひまたくねさや押明しる聯句せんとく
片歌ひとつ川荷ひ出されるゑ
むすつきる竃の艶やるこえしぶ　東宜
とうくみそく消し軒の月　求古
ぬうえ汁異罵の椽まね赤ろて　雨葉
鶏ゟさ　时　いそくこし　芸堂
あけ山くゑうかくはハいつも玉　蜂友
盛りと出れ　萬葉の舩　月居
酒の徒俳諧席ようちまる　古
隋識を本まうもやさしかりけ　宜

きしゐれあはくとを拾く　堂
水ふきかゆるかけろうの井　葉
ふふ起りま素れつるき　いく所　居
るる根ゟ鐘ゟ聴しうるれ　友
入定の夕さびしうめく庵し　宜
飯一口ずり　月を三年　古
舩ぬくるを雲の和泉の灘つきる　葉
小まん小女郎を送る出代　堂
的晩まうきあかそ寸はりえ　友
やよかんこゐ山うつき　せる　居
行そ起れ房ハ氷室をとらるらん　古
浅くましく　とれいきね人　宜

琉球使ひ[illegible]雪[illegible]奥
[illegible]結[illegible]風情[illegible]
道高[illegible]堤[illegible]雅[illegible]十年
来社[illegible]投[illegible]漆餅
[illegible]麻[illegible]阪中[illegible]
[illegible]成[illegible]
蟬[illegible]声[illegible]
[illegible]いさよひの[illegible]
[illegible]
[illegible]
小[illegible]火[illegible]
[illegible]所[illegible]

坐菜　居友　宜古　菜坐　友居　古宜

あやめひく泥の根や球[illegible]
[illegible]きて馬士の酒盛
[illegible]起[illegible]
[illegible]

坐菜　居友

文化辛未秋

抑も古人のひとりくは風歎とあそひ白帆と一連て落花流
水とかゝつまとも人とまつりと出りてあつくきなとたらく作て
いさゝとそれは俳諧ははやりと簡にはさうて我は此誌の口
癖を尊ふよふりするき境の中にはつらねて多月とこゝしぬ
あるいは蒼梧会の句集を前んでも取るよしてあつまる人は法の
おこめりのみにとまちよ自くしくれぬらりに出来る一
題とりし識とは使り鶴のまりしかとしむき此翁の新壱
の俳諧の水まさりにや月白はらきにけりひなきなれは
へ白井がちの秋風にまう人を恋偲しつゝきとかなねや
なる山を撰集と発して氣は人をあらはし写まのと
いよ田蔵はかくしはあられる洒落なる里の世きすゝしられ
い中七字の草軒にちらくあり初窓や吐広の品織乃

枝律としの極のうの猿の籾実は数ひき大家は金
銭出みきる中かゝて龍花良神のうしかは酒くへからく流
れてあそこはあるその踏にも先果わるもむめんめりてさ
なるまゝか師は務をこの降くむしけて十とせあまり行く志にしく
小さきを断る姉けさは主国筋の出所のりのてうよりは主法の
つとく何の筆あらむいやとよるほとくふね磨はつ筋くは成
かりて歯をあらはせりと書殊されけるか嫉しく實南あわれ出所
上方えへの浮くてうち深き入くて浮くふ用にまゐりたるは
多くを見へ人もしく猿は先へ行屍を知りてもろくへともかま
ともかもしかへきるけとあるをまうせしと云

布席庵主居なる人の
よしかき述ふ

簾乃柄

はる雨はあかりとゝまえかきつまる　書標
萎ちるや満月に萎る笠は人　精羊
葉めしたく窓を持たりやせは猿　如雀
まとしさや野なるは野りを澄の町　松園
雨石太腰のわりちは牛若丸と名つけ
たる身はいなとひょ柏の迄て
そも極よ兜巾もかきんむきし場　太呂
一しきり雪にあるるき柱系へ　亀人
卯は方よりさ絵をみる日枯野原　梅月
十糸杖の月よ見ん出し暦うれ　波静

かしし菜に花ちるしまく　雀　鹿児
みきわめと　狗頭りるまりかんこ　李邦
狗蹴桶のうつもさるけ　太兎
子は被女の　ちるは　菜　聖柳
うの　のるは　みるは　星尤
山里ハ菜も　海山　きくれ　花　月岬
山伏も　雪車も　ちるめ　冥府
芝　菜　おそひも　こけ　蹴毬法師　表宏
蕎さしよかつ　降るいつ　風　沢風
砂道や　粥　煮　涌清水　呂川
きくれも　粽　うも　山　町　呂潤
雲風

行　は　は　く　あ　し　わ　梅　は　花　湖帆
す　し　き　わ　は　つ　ま　む　や　う　と　る　て　呂圭
立　の　ほ　る　月　り　松　と　を　は　し　し　月村
卯月十日　小屋は梅のさかりをすぎぬ
給　き　く　仏　う　は　れ　く　う　め　は　菊東
桂女は　男　り　つ　れ　や　火　る　を　虫　雀子
辻　う　な　な　ら　れ　き　り　小　松　る　湖畔
蜻蛉　霧　の　消　な　も　く　や　水　り　し　乙二
ち　し　き　や　菜　雑　う　ま　き　松　う　さ　一口
松　風　よ　う　く　扇　は　忘　れ　や　う　三つ女
結　ひ　る　き　は　へ　る　り　き　は　ア　乙国
年　は　柄　ま　く

月により日にしたがひて時雨は白
月は秋いまもてあやしまるるを　三笑
家路かな　招売は花のうるはしき　志吹
三陳ハ小ろもちもねめや　鉢叩　雨十
たくれたうや　冥加なるうつ　藪の家　名石
けしきを　西は方　迎すまひ　文貞
　　岸は柄となりけり　僑居
　　うつらしく　吋
　　打紫は牧ほうかれや　炉のけむり　七二
　　あくる行しく
　　たのり月はりもあと　七二
　　ぬるひるもれく　うるはし　香雪　来車

年〻こゝろ深く入て　河あり　二李
松は老去は松は風　市く　二李
落くれハ交はぬくなるいとまも　二李
たゝれきをる　羽はぬける　雪　二李
迷子をんつけてゝ　秋をきて　二李
蹴あはは　のほろくと　苔　二李
さく　垣よ住くろめる　宇治の家　二李
市はやうるきぬくてある　二李
秋もたれ　続はうを　吋　白き　二李
月をさゝてうつる　延　帆　二李
松くまよ　芒ハ月をもむへ
扇うして　旅を　なくさむ　李

朝ごけ　ふるまふ　泳長の　三豆不二　二
さくらを　花と　手巻る　男　遠　夜
鮎うるけ　あいそを　笠を　後さして　二
ゆるむ　清水の　わく　巻の　ちる　夜
分まうして　寒日　ふる　秋の　坊　八
ゐるさ　つれも　清るしら　を　三
藻屑　を　面白　うるて　ま　死越　夜
宝くへけ　おそれ　ちるも　二
さつきもち　ひさ　縣　とひ　人て　夜
待の　紡　やら　十月の　まる　二
情しる　宿る　春　まるを　春てしまし　夜
待け　水け　よるも　つる　まし　二

山　巻　かへる　紡け　あそれ　夜
弓　ゆる　くる　け　古　け　自　二
粉　虫　を　ひ　せる　人け　立　ひ　夜
小　野け　け　の　す　掃る　ゐ　二
絶　す　ひ　ひる　おと　人　ひ　夜
お　四　く　を　の　そ　活　鯉　二
巻　夫　姫　け　日　和　と　く　見　夜
茄　子け　曲　も　本　れ　ゆ　人て　二
ゑ　雀　ゑ　姫　人を　沼　唐　の　巻　夜
ま　ち　ひ　さ　け　結　二

抱籠やとの消てもねいたし　冬　張

あやめ葉のかきつばたのくきもなし　乙二　張

つゝを吟ゝ蟬啓けば朱唇樗まく

虫やゝ鳴虫　すゝる　後の

三日月ゝ人のありもあられまり　二　張

踊子ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　二　張

うゝ彩　結　校かゝゝ和女郎花　張

流のゝ　けゝ水てゝゝあれ　二　張

さもぬきゝ馬間ゝ宿のあゝゝ　張

孫はあゝゝ人ゝくく山義　二

巽かゝゝかそへまゝゝる雨は松　張

須ゝはゝゝゝ八月ゝ移ゝゝむ　二　張

ゝはゝゝゝゝ夜桶は火のゝ　二

小蓑ゝつゝゝゝゝの庵　二

白雲ゝ結ゝゝゝゝゝゝは結　二

折かけゝゝゝゝ枝ゝ茅ゝ結　二

ゝゝは住ゝゝゝゝゝゝ多て　二

いつも蛙は青ゝゝゝゝゝ　二

三猫は移ゝ移ゝて今注進は内　二

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　二

ゝゝゝゝ梁ゝゝゝゝは出せば結ゝ　二

あゝは君は今ゝゝく　二

ひとりつくしてはかへる夜庭　二班
山ハ高く山ハひくくうゑ　二班
陰與と出羽と別れうゑのと
鬼灯燈をとて出羽　二班
麻の服濃うへも月うさし　二班
夜涼　ちる秋ハ　二班
あつ美を味噌うつ世て祝ふ尾　二班
つゆハ蛍ほと灯　花うさく　二班
ちをひちれ急仏のつりる小丸山　八
子れうまつうる尾ちとく　二班
いくちちも白数のつる旅のう　二班
引出し揃れさる戸の尾　二

花れ庚ふつれ春柳も白ふく
又形をうきハ　ひとする表　二班

蓋茶ハ密さ　梅れ　学班
ふさ　ハ萩ち　望れ　春袋
蓋ちれちく　ゐる　嚢　れ　南蟲
卯月ち多れ四日七年庚ちる武婆の
鰐ちつあつ　ちつあつる孫ち
柊ひ居ちちの

紙衾に尾や流るゝ為ぬしして干てある　彩子

為減ぬとゝろも蓑に寄て寒し　恒二

芋蕷たく籠もたのゝ蔓に秋　祖庸

乙松や実方まつり寒う　一玉

流るゝハ流して芹をそゝきけり　三松

水けを舳よくとゝしいくを　暁雨

日くるゝほとゝを七面山をくるゝく芹の

柄ばかりとなりあはして

あを貫のりゝ安くを陣しける　文麦

風ふきも志ぢゝ泉し池に鴨　千流

服さゝをに苔もるき宿に重ねる　江越

代表河岸中に廣ハゝを留る　三水

堀ゝを西に星に月ゝ式　東葉

一水語ゝゝ山駕をゝるゝ掛けゝ

法ゝハゝ岩手に山に見ゆるを　佳升

美ゝゝも松ハみしゝゝ走ゝ雲陸　月圃

女子ゝハゝ松掛多ゝ早苗ゝ　乙逸

桃の花折てもく　風叟

三月や稲つゝ西に山に　不流

加賀西風くゝゝあゝく愛て

葬ゝの子代ゝつたゝ西風ゝ　松山女

扨こ杉八世渡い性てきそ小夜原　李圃
猫の出くるゝ見とし雪の夕ぐれ　柏月
月こそ今宵と見るを申して
忘れても帷子めさるれやこそあり　素月
火桶置きやうそしたゝき横笛ら　楽女
寿河を千々の鶴取居まとめて
沂ぬくひ寿白き月ハ出るまり　有水
まる薬ま寒し堅木の酒なべし　弥女
居来となき冬こそ申して
大雪やゐんる車のまい胡粉げ　仙風
薹芽のふりとまわるや浦の破　諸彦
寿立てまさ九日といふ日より御しそめ

病まかしてやよひ半ろるゝふもいはさ穂を
りさけそ
蜘手まる波とまるし渕まる　乙二
鷺立つる出入八寿まうま夜まし　ゝ
たる肴亜叟の例まゐ取計麻り
け人もかく
榜挨るうちそさ春姫たつるひめ　太呂
大野の里採月辞へ弥遠中
芽をはりて大くゝ多の森ましたま　林字

清水のほとりにて

これやうな菖蒲ふきてもこさるれ　乙二

藤のこゝろハ寺しゝ寄藤ゝ　亦席

うゝ鶯うゝれたゝ鳴き法ゆしや　二

更衣ゝしまる出て　席

ぬゝ鳥鳴くほとゝ月　二

本樫ゝ花ゝ咲ゝ　席

小佛ゝ　二

ゝこれのうゝけのうゝ四　席

風呂ゝまゝ法ゝ　二

松ハまゝゝく　席

白法の中　二

拾ゝ　蝶ゝ

殺ゝ　二

淀ゝ　席

心ゝ　二

山ゝ　席

時ゝ　二

柄ゝ　席

遠ゝ　二

何ゝ　ハ

蔦ゝ　席

義ゝ　二

蕎麦ゝ　席

[illegible] 二席
仕付芋とぬりの服をやりけ
[illegible] 年[illegible] 二席
さく栗は伊賀八幡宮月見を
[illegible] 二席
[illegible] 二席
[illegible] 二席
[illegible] 二席
[illegible] 二席
[illegible] 二席
[illegible] 二席

菊[illegible]く出る道の[illegible]さ[illegible]き　席

芭蕉翁七書

小本　全部　三冊　出来

仏書八翁一巡[illegible]
[illegible]
書八道[illegible]
おくの細道、嵯峨日記[illegible]
篇、数句集[illegible]
書[illegible]四方の好人[illegible]
[illegible]

芭蕉翁附合集評註　雋老著　全部三冊

此出ハ、蕉翁ノ晩年ニ、翁一世代附合ノ要
ヲ、こゝ迄とゝのへ、こゝ迄味をきはめ、こゝ迄名をとゝめ
ざる人ハ、此出を格標とすべし

俳諧名所歳句集　全部四冊

此出ハ、遠国ニ住して、神社仏閣山川津浦に、名
まで、名所古跡名物名産ホトヽギス、どいづれて、守武
貞徳ガ、先輩ニ、角歳書の先輩、ヲ、ヲ、ヲ、ヲ、
の名家の歳句を、あつめて、詳ニ
すべて此ニ、新の出ハ、いろいろの、ぬ、ぬ、ぬ、
して、大きな益ある、出ヽ

附録三十六家

可部里

四月はつり船のくるゝ和歌
たちまちに、ふかけやかゝらむ自の素
ち、婆の家ゝ、出ぬ、くゝ、ゝ、ゝ、
物ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
押回して、やゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、

岳幹

麦の穂のうつるを着ちしめ行
枝うちはさうくにし麦の髭
あれゝくと吹や花にも寄附し
手ふよ白く京やこさひの郭云
古沼よりちよ見るゝ寄の翌ひなれ
眠るかけは草まくらを須六の秋
母の人をみさうるにしきけふの月
ありたまのまみちと表紫の都ぞ
関あはこゝらよ落しかいつ里
又けきひきるや関あの嵐やすす

卜鵬

降し雪のくるゝとみるも麦の風
蝶ふ舞出ぬる日くむく田の鳥
手ふ留なりこゝしく盛りし麦の山
鶴の舞田中の古も足出ね
叢の雨堂の承る道まかりし
二十日ときまりのあくとすゝはゝり
草をとめくく章よりたる人たつる郎
君ら代の子代の牧ゝも稲さゝぬ
雪降とわりし尾花も刈られまる
祢門小鳥くもくもとりまし
楽くぬるや本の名は奥をまこしく

求海

永日や数とひとつれ京也書
霞雲や煙子はむすれるまゝて
朝酒に世あらくの鶯の宿の窟
毎朝ゝかへるはまりつゝみ
居ながら元てあるこゝ山月
雪月やまゝ[illegible]たる花落
四人寄集めつゝ[illegible]の水つゝひ
雪ゝゝゝや[illegible]人きゝ酒一ツ
冬ゝ[illegible]つゝ[illegible]れ汚しけり

雪雄

元日かゝゝ二[illegible]れまゝれ
雪れ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]れ

花れ[illegible]ゝ[illegible]ゝ人ゝ飽ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝの色
梅雨を[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]れ
あゝゝれ初花ゝれ[illegible]の中
釣人れ[illegible]ゝ[illegible]ゝすゝれ
吹あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
榜れ本のへゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
雪れ松ゝのゝゝれよいと

玄桂

灯ゝつゝれまゝ紀[illegible]れ[illegible]
獅れや院れ[illegible]ゝ白
赤ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

花は身まゝもや起さくら　朔
うけ印よりゝは菓はふらひにけれ
まれはる酒はふるまひにけれ
涼しさよ逆のまきも世は小田は響
名ゝは家や宝は二重れりの
十月や扇はみしきと鳴かもめ
鴨鳴や冬の日数つゞく静けさ
蒼虬
ゑうつれ名月と畑はほられけり
まくれまき今庵のつねくうぢの蛙
旦麹は薬ぞ葉ぞ花は咲
花は月も散つゞくもまたまさり

ぬくめ鳥小野精はあしらう子　槻
棒子も小ひろつきてきうけ入の鐘
行燈よくひるま出来く　蒼
鶴の声くくもすゝれ下ある蔵義
嵐は宍の暁らしき衆おちれ
霜ふるに音ハ入江は小舟か
寒松
鶯は黒鶴や河の水まかくも
梅ちや桃やくいかなる櫻は宮
はるふ花その江の油はなうしよ
春よりもひさしやかんこ鳥
まうつや井戸はおもちろき葉

里は柳の流れはるかしこの水
ひとくひを花のうき道をみわたすよ
はるかひを風はしくのう庵はまや
大さうれ海を音よりつちとう武
さうしは股立歩るみそれ引

道表

梅ゝあるよ春なつかしや去ぬる
やけと猫かくてもまを去れぬる
はる海まゝゝ行てあさうかや雀好
ちゝ梅自ゝいれ着てまりめへし
立道へのれゝ号毒ゝ五月雨
星合と咲ゝ人月ゝみし

陸奥は名大きをあてた川
うつはけいしらぬ義ちる本樫
雲はさくゝのしはけるも老にし
我ゝ垣もようやけ笹は雪

梅

價

物もらゝ度ゝへつゝ屋は梅
やはるは慣けもぬけく春は雪
ちきくゝと名ゝうて鐵月
咲ゝきをきはゝきくゝのは花
物ゝ新は名鶯を山本雪
屋ゝ名一男つまし酒さゝ孔
船はゝ初林ゝ雪は峰

白つゆとむすふやいかに鶏手水
釣瓶や細れてつきのきぬ切
冬枯や豆にも月して見れ書
三清人

世の中はひとつ咲ても梅も
一とせは餅もちつけよしの山
名のこれいそれ表そふさう
茶の花や豆は松山しつかり
しつかれて霞あり志けの花
鶯狭しまふれく梅よむより
下も来くきけんにても山の月
先塩士は神の日和や花落

雪来しと火桶をかこふ夕ぐれ
梅は松をかけして焼る会ぐれ
桐栖

山里や人は起来れうめの花
子供なく秋のよくよく月と梅
庵の松は咲きるもせく花を浸
松は松とく人来てきまをかすけ
見れとよ山咲ちるとみるまゝ
つまるかくれをひよろる夜の月
草むらの萩は雲ねをするや秋
つれくまれ猫をかけてきる夜し 水
鳴待くも居るそかれのく 鶺鴒

みそさゝい来ぬ日もなくて木からし　吉高

嵐は麦のあらしとなりにけり
傘さして出れは寺ははれかさし
面影は花さかりし一重さくら
花をまつ巨燵もすれのそらつれ
鉢夕を田もつくりてなくかれ
出千に仮ふかやなしの末棺
むら堤や朝のさくら大竹座
きちりは花咲時千代と思ひきれ
小督文の歎きよや竹の月
霧月は霧なるらん葱汁

梅うくや薮より竹は法輪寺　堤翁
もはなれしおりしらや春の風
山吹へは帰るとらへひわり
花まで出る日も見たるは新ぬれ
堤は子に変れ出来てる足さく
みそれは花なりつ秋を見らし
と朝まうへもかへりや藤の月の梅
しらくとるはなくなりしく作法
住まよもむるも霊くその相あんく
たてたきや僧の履ろいきかへる
椿堂

人とあるかしらもうつせみの
梅さくや垂こめふるる雪の宿
木ぶかき山ぢ雪ふかしかぜさえ
ふる雪尾ゝつのくまもあらはれ
二ぢ三ぢたゝてやつしる枕
村雨れおれ風ふく杜宇
ちゝくゝとなくなれてあそぶ蘆ふく
又月やひかり梅ちるはなれの糸
名ゝゝよみつゆよりはけ
雪霜しゝてふるさと山ちゝれ

慢ゝ

殿梅や去年あちらさく梅の花

さゝのくゝと小石やしりうめ井
ゝゝねのあゝつまめく丘ゝ
雲井ゆく流れ山ゝりこゝ
ちる井ゆくゝさゝ墓
芝刈井ゆゝあくゝきゝ
梅ゝ八重ゝゝ風さくゝ
木ゝゝゝゝゝ井秋
夕ゝれや何箱の島も秋の井
去ゝしや麻ゝ刈る松井宿

嵐外

俳諧八雲より梅花
蕉翁 何のゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一案

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

中案

[illegible]

しら〱と花にかすむ夜の月
一日はとらしまり鳴かハつ
もり来や瀬の落る芋畑の山
はさらりおやみも暮らやハ薩
つちと月おもなりし芭うれ
けふは日も入や本栗のおく家

子

新

ちる里のつけハこれ散かね花
味はく初る雪まゝ比良鐘
なお花や小寒い淡き山寺
出ヨりて蓑翠は緑盾よきり
狗うらさくゝ寒さ抑ひきや

菊ここ宮家は山吹さらりくし
はく藤菜のつゝまなきりかんご雪
うつらふ萱こゆれハ鴉は梅
をよれは山ちるゝも宮野花
炭ちらく人になれきり餅荏

菱守

御そとはさきたる人里梅の月
妻面はあるかれもせぬ田の鳥
足白き猫ちらりし妻は宵
花まつやけそらくと露つくり
松は家上背中さゝれ更衣
子飲お八合欽は其のねみてすや

てらしまぞ物のひらけに粉糠に
窓一つあかりに楓の月夜かな
秋風や今来るさやうよ鳴雁
数つもる事や十夜の玉あられ
瓢風
吾家は芋しらかる雁窓前
わか子は葉やたれは竹のけ
かけるとれはみぞまるも雲は心
子規なくてそれは気鶯
月花やまほまくらは枝宮
鶯は桜よりもしくものの月
箪よけまつれはまり やさ岸

里市や魚かさりたる菜葉かな
唐崎やまくらあまる秋の暮
篠山やつゆけき月のくまもくる
鶯笠
鶯よ我は久しき山家かな
人まちてともしくのもさ世の梅の花
新しき鳴やまるの翁なく小波こし
吾まつる我も吾か家も恵比科するて
家僕との花ものにたれさくなれ
若柳やあかさやまとやまき
けし一式背は延るさて哉も
雲はねの鳩笠は鐘もまたれへし

六書

宣阿

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

八朔や松は[illegible]

あさぎ[illegible]

[illegible]

婦人[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

草花

[illegible]

月出るかたのかはれ [illegible]
[illegible]
[illegible]

星潘

[illegible]

あつき日やけのあとの利根の裡
岸の柳の枝てをかけて星人和
炭おくるとゐゆしかや 海月居

柳はる

柳はる 紅はこうの式
あつかりくも大はれ孫つ炭菓式
社宇かうてうもけくいたれる京
和歌秋の雲つき安し炭の杉
星はれとうの結うをあつしけを
よく文てつさよひらくかを雪
ひうたつ芝寺とすてうしを
うるかなる秋とを待はさうく

冬はれとかりたれはうをを
梅はれ雪大とを年よき 高式

月居

又六梅久しき梅はつを式
明て約さをくはれ別式
はえくよかつて義拾て丁の李
郎をやくまはれ
けし林雲雪八なくても表も
白雨をうはをくを雨 孫衣
さをはうをはれを正くを 船
年くを高をあり秋かくを
埋火やをををうをもひをを人

[illegible]

追加

秋風や楢よりこぼれ[illegible]　北花
ちるわくを[illegible]　濃柏
四ほのや[illegible]　雪花
[illegible]　素琴
[illegible]　蕉雨
山里ハ[illegible]　冥々
[illegible]　秋風
[illegible]　布帛
[illegible]　岳村

正月や[illegible]　義良
[illegible]　桃青
[illegible]　三江
[illegible]　百川
[illegible]　李寥
[illegible]　中林
[illegible]　岱秋
[illegible]　甘谷
[illegible]　千河
[illegible]　古節
[illegible]　昌く
[illegible]　丁岳

侍士ら火打袋い消きもとれ等
こうや嶽しまれ水神
あつまはやくらのつきし糸桜
夕さくら花もしらしまりいまる
笠も赤るゝ心して無あり
年経ゝ其宮殿を出給いかゝ
仙あり此奇雄つれ桂の
きつゝみ一文節をなくへまり
等其戸や何八なをしを和ゝけ
はゝさ成二度ゝ実ゝ和尚
夕ゝや岩茅かゝ山ゝけ
上洛其氣ゝ深ゝしゝ長

鶴の
杜若
高位
宣旨
ら源
等高
桂川
東源
去卯
赤木
冨高
一蔵

二人ゝて宿もかるゝや精まり
ゝ其ゝもあゝむ若其あゝし山
作山る若ゝ若ゝ行ゝちふさゝ
白雪やさひしきの歩ゝうゝ
高ゝ沢萱ゝて麻の呼ゝ
手ゝゝ打ゝゝへようゝ其
分よつきゝやゝゝゝ月
苔ゝけて杖ゝ月
曙其めつゝゝ海其私
ゝゝ松や小舟て来ゝ世仗
ゝる呼ゝ其ゝたゝて等其
花ゝるゝゝて春ゝく其千海

月化
冨改
野危
甫海
曰人
武陵
雪尺
万利
茂桂
岱雪
雄令
麻古

土佐
五月
雷雨
不敢
石金
葉不
遊史
井水
油丸
仙風
子崖
去先

[illegible]
[illegible]
[illegible]

河内屋源七郎　四拾匁

長き事はなほ一把　丹雄

新あさぎ　玉く

かへりみなとに鶴もつもりぬ　茅根

屋八くさつ田いさり火　月岬

とりの笠折はかりとすゝきの風　広坊

味はひよき茶にあきて秋の風　南井

簾ハくもりはれ　黄爬

8502
28

糞句注解　俳諧故事談　古人の名句河峯て月雪花名所山川年中の景時節にしたがひ四季にわかち和漢の古事を引て句の出所を正し細に注釈を俳諧好人の見やすくて第一の書なり　全二冊

流行百家句集　絃六輯　尚時名家糞句新撰して集む　小本　全四冊

大黒菴寄淵老人著　俳諧めさし袋　去嫌四季詞分附合を引てふるの秘伝俳仙糞句をもくわしく世に知る秘伝口授とゝのへ記す　三ッ切　懐中本

文政三年庚辰九月糞行

大阪書林　心斎橋通北久太良町　塩屋忠兵衛
同所　河内屋茂兵衛
同　北久宝寺町　河内屋源七郎